# 津山市史だより

2016.3
第5号

津山景観図屏風（個人蔵　右隻・部分）　津山城と城下町の背景に、北方の山並みが描かれている。

南方の石山から見た津山市街地方向の眺望

江戸時代の津山およびその周辺を描いた絵画作品は、今のところほとんど確認されていません。そのわずかな作品の中でも津山景観図屏風は、津山城と城下町を含む広い範囲を写実的に描いた非常に貴重な資料です。淡く彩色された六曲一双の屏風で、右隻には秋深まる津山城下が、左隻には二宮・院庄周辺の春の風景が描かれています。作者は、江戸一目図屏風で知られる津山藩のお抱え絵師・鍬形蕙斎です。

この作品は、江戸一目図と同様に複数の視点で見た様子を巧みにまとめあげたものであり、どこか現実の場所からの眺望をそのまま描いているのではありません。ただ全体としては、津山城下および西部近郊を南方から俯瞰した構図であり、城下南方の神南備山や石山からの眺望に近似しています。従って、背景には津山城下北方の山並みが描写されています。

右隻の山々に注目すると、右端には那岐連峰、第2～3扇に烏山と天狗寺山、第5扇に黒沢山（推定）が配置され、多少の誇張はあるものの、それぞれ実景に近い姿で描かれていることがわかります。

（小島）

# 編さん委員会

## 27年度 第2回

2月26日　於 郷土博物館研修室

まず、平成27年度の編さん事業成果の報告として、事務局および各部会から活動報告が行われました。続いて、津山市の第5次総合計画策定における編さん事業の査定や28年度予算の内示状況、4月から嘱託1名の雇用が認められたことなどが報告されました。

その後、編さん基本計画の修正や通史編の本文の仕様、28年度の編さん事業計画などが協議のうえで決定されました。

### 編さん事業の経過（平成27年12月～）

12月19日　第3回民俗部会
12月　「市史だより」第4号発行

平成28年

1月16日　中世文書調査（美咲町）
1月16～18日　京都府立大生民俗調査
1月30・31日　近世文書調査（博物館）
2月7日　近現代資料調査（博物館）
2月13日　第3回近世部会
2月26日　第6回考古部会
　　第2回編さん委員会
2月27日　古代・中世合同部会
3月6～8日　京都府立大生民俗調査
3月12日　編さん室嘱託員採用試験
3月31日　「市史研究」第2号
　　「市史だより」第5号発行

## 『津山市史研究』第２号発行

新しい市史の発刊に先がけて、調査・研究内容の発表や新発見資料の紹介、編さん事業の周知・広報を行なうため、昨年から『津山市史研究』を発行しています。３月末に発行する第２号の内容は、以下のとおりです。

・北村　章「明治十年前後の津山地域史素描 -大旱魃・民会・国会請願-」
・森元辰昭「津山地域の金次郎像・報徳運動の研究（その２）」
・井上靖子「中山神社御田植祭の基層構造とその変容」
・平井泰明「中山横穴墓」

# 部会通信

## ◆自然風土・考古部会

（部会長：河本委員、副部会長：可児委員）

自然風土部会の能美氏に、「津山の山」についてまとめていただきました（本号研究ノート参照）。引き続き「津山の地質」についてまとめていただきます。

考古部会では、資料編について用語の調整等を行いました。また、須恵器の窯跡について電磁調査を実施しました。窯跡の場所が、ある程度特定できるものと期待しています。

## ◆古代部会

（部会長：狩野委員、副部会長：今津委員）

2月に中世部会と合同での部会協議を行い、資料編「古代・中世」の体裁等の概略を決定しています。今後も引き続き、資料編出版に向けて資料の調査・整理を行います。

## ◆中世部会

（部会長：三好委員、副部会長：久野委員）

1月半ばに美咲町の幻住寺にて、久米の倭文庄関連の資料調査を行いました。

2月には古代部会との合同部会を開き、資料編の概略を決定しました。資料編出版に向け、引き続いて資料の調査を行う予定です。

## ◆近世部会

（部会長：定兼委員、副部会長：在間委員）

1月末に、西矢家・美土路家の文書調査を実施しました。これは、郷土博物館が旧加茂町域から収集していたもので、今後の資料選別を見越して概要を調査しました。

2月には部会を開き、28年度の作業計画を協議・決定したほか、資料編章立て案の検討を開始し、継続協議となっている松平家時代の章立て案に関する意見交換を行いました。

## ◆近現代部会

（部会長：在間委員、副部会長：香山委員）

12月に久米歴史民俗資料館で保管されている資料の調査および選別資料の写真撮影を行い、2月には郷土博物館内の未整理資料群を調査しました。それぞれの館で、津山市の近現代を語る上で、重要な資料を多数確認でき、参加者一同、大きな収穫となりました。

4月には、岡山県立記録資料館での津山関連資料調査を計画しており、資料編の編さん準備を着々と進めていきます。

## ◆民俗部会

（部会長：前原委員、副部会長：安倉氏）

12月に部会を開き、秋祭りを中心とした調査報告を行い、今後の調査計画や執筆分担を協議しました。市内各所での聴き取りや民具などの調査および「食」に関する調査も、継続して実施しています。1月と3月には、京都府立大学の東昇氏と学生4名が、勝間田町苅田家の神棚や旧久米町の為貞家資料の調査を行いました。

須恵器窯跡の電磁調査の様子

研究ノート

# 津山の山

能美　洋介

「津山」の地名は、江戸時代初期に美作国の国主となった森忠政が、築城の地を鶴山に決定し、この地を「鶴山」から「津山」に改名したことに由来する（藤井 監修，１９８８）。鶴山付近は吉井川やその支流が形成した盆地となっており、この盆地の北には中国山地がそびえ、南は吉備高原が広がっている。吉井川支流宮川の吉井川との合流地点の標高は約85ｍであることから、ここから下流の吉井川は河床勾配が極めて緩く船の往来を可能にした。江戸時代には、高瀬舟での物資輸送が盛んにおこなわれており、中国山地の産物を瀬戸内海に搬送する港＝津の地であった。

津山市域は、津山盆地に流れ入る吉井川支流加茂川に沿って北に広がり、加茂川の流域を形成する山地の分水界が市域境界となっている（図１）。加茂川流域は中国山地脊梁部の南麓にあり、最上流部では標高１，０００ｍクラスの山々に囲まれる。三十人ヶ仙、角ヶ仙、大ヶ山、桜尾山などが国土地理院の２万５千分の１地形図（以下、地形図と略記する）に記載されており（表１参照）、これらは東西に隣接する鳥取県智頭町および岡山県鏡野町との境界線が通る山々である。しかし、最北の鳥取県鳥取市との境界線をなす分水界から北東端の黒岩高原にかけては、中国山地の脊梁分水界にもあたり、標高も９００ｍから１，０００ｍと高いにもかかわらず、目立った頂上が存在しない。このため、地形図にも山名の記載がない。

中国山地の隆起は、日本海の拡大が起こった２，０００万年前から１，５００万年前（新第三紀中新世頃：磯崎他，２０１１）に始まる。現在の吉備高原とともに、準平原とされる平坦な地形が徐々に隆起し、その運動は約７００万年前頃から段階的に、かつ急速に進んだと考えられている（小畑，１９９１）。また、その少し後の時代に

表１　津山の山 40 座

| 山座名 | 北緯(°′″) | 東経(°′″) | 標高(m) 三角点 | 標高(m) 標高点 |
|---|---|---|---|---|
| 天狗岩 | 35°16′03″ | 134°01′04″ | 1196.5 | |
| 滝山 | 35°10′03″ | 134°09′03″ | 1196.5 | |
| 三十人ヶ仙 | 35°16′48″ | 134°01′17″ | 1171.5 | |
| 角ヶ仙 | 35°14′28″ | 134°00′15″ | 1152.5 | |
| 広戸仙 | 35°09′43″ | 134°07′32″ | | 1115 |
| 大ヶ山 | 35°14′28″ | 134°05′01″ | 989.7 | |
| 公郷仙 | 35°10′05″ | 134°05′42″ | | 862 |
| 桜尾山 | 35°13′56″ | 134°08′48″ | 956.3 | |
| 大釈山 | 35°10′46″ | 134°05′34″ | 848 | |
| 天狗寺山 | 35°08′46″ | 134°03′03″ | 831.5 | |
| 山形仙 | 35°08′23″ | 134°06′11″ | 790.9 | |
| 甲山 | 35°09′10″ | 134°08′06″ | | 777 |
| 矢筈山 | 35°11′52″ | 134°06′16″ | 756.3 | |
| 釈山 | 35°13′09″ | 134°09′45″ | 753.1 | |
| 入道山 | 35°09′39″ | 133°59′04″ | 752 | |
| 鳥山 | 35°08′02″ | 134°03′08″ | | 701 |
| 寺山 | 35°12′09″ | 134°03′16″ | 681.4 | |
| 黒沢山 | 35°07′56″ | 133°59′15″ | | 668 |
| 矢倉山 | 35°06′05″ | 133°50′44″ | 659.4 | |
| *天子山* | 34°59′22″ | 133°52′46″ | 646.2 | |
| 枡形山 | 35°08′06″ | 133°58′05″ | 644.9 | |
| 大崩山 | 34°59′02″ | 133°53′45″ | | 643 |
| *妙見山* | 35°06′05″ | 133°52′09″ | | 613 |
| 白金山 | 35°12′06″ | 134°04′13″ | 591.8 | |
| 佛山 | 35°08′36″ | 134°07′21″ | 541 | |
| オビサオ山 | 35°08′43″ | 134°07′40″ | | 518 |
| 幻住寺山 | 35°02′36″ | 133°52′04″ | 510.4 | |
| *岩柄山* | 34°59′30″ | 133°54′23″ | | 503 |
| 中の谷山 | 35°04′53″ | 133°50′00″ | | 499 |
| 加治子山 | 35°02′55″ | 133°50′06″ | 491.2 | |
| 岩屋山 | 35°04′34″ | 133°50′03″ | 482.6 | |
| 高見山 | 35°04′33″ | 133°50′51″ | 443.9 | |
| 取首山 | 35°02′53″ | 133°51′01″ | | 440 |
| 金剛山 | 35°07′50″ | 134°06′40″ | 385.3 | |
| 神南備山 | 35°02′45″ | 133°59′17″ | 355.9 | |
| 神楽尾山 | 35°05′05″ | 133°59′04″ | 308.2 | |
| 笹山 | 35°02′06″ | 133°58′29″ | | 306 |
| 嵯峨山 | 35°02′51″ | 133°57′22″ | 288.5 | |
| 糠山 | 35°02′38″ | 133°55′21″ | 261.5 | |
| 天王山 | 35°06′23″ | 134°05′13″ | 236.1 | |

※山名が斜体の山は、三角点もしくは標高点が津山市域外のものである。

図１　津山市の山 40 ＋ 1 座

40 山は地形図で山名が読み取れるもの（表 1 参照）＋ 1 座は黒岩高原
標高 150 m以下は白抜き、標高 200 m以上は濃い灰色で塗られている。

図２　大ヶ山から見た黒岩高原

なって、玄武岩質の火山活動が起こった（山田，１９６６）。玄武岩の溶岩は粘性が小さく流動的なので、地表に噴出すると平坦な溶岩台地を形成する（図２）。溶岩の一部は布滝（図３）や大ヶ山の山頂付近で見ることができるので、市域北縁の分水界から黒岩高原にかけての広い範囲は、数百万年前までは広く溶岩台地に覆われていたと推測される。現在、大ヶ山と黒岩高原の間に阿波の村落が細長く展開しているが、ここは加茂川が溶岩台地を開削してできたものである。

津山市加茂付近では、加茂川とその支流の倉見川が合流する。この付近の山は脊梁部から少し離れてやや標高を下げ、６００ｍから８００ｍ級の山々が座している。西から入道山、白金山、矢筈山、釈山などの名前を２万５千分の１地形図から拾うことができる（図１）。加茂付近の盆地部には広く花崗岩が見られるが、それぞれの山体には別の地質が分布する。ここにみられる花崗岩は、約１億年前から５千万年前の中生代白亜紀後期から古第三紀始新世にかけての時代に、地中深くにおいてマグマがゆっくりと冷えて固まったものである（産業技術総合研究所）。このマグマが地下に入り込んだ時には、マグマの周囲には古い時代に形成された岩石（変成岩など）が母岩として存在していた。入道山や矢筈山の下部には、その母岩であった岩石が残っていることから、中国山地の隆起は侵食を促進し、それは花崗岩の深さにまで及んだ。加茂付近では、河川流路の近くでは侵食がより進むなど、侵食の地域差が発生し、反対に侵食に免れたところが山となって残っている。

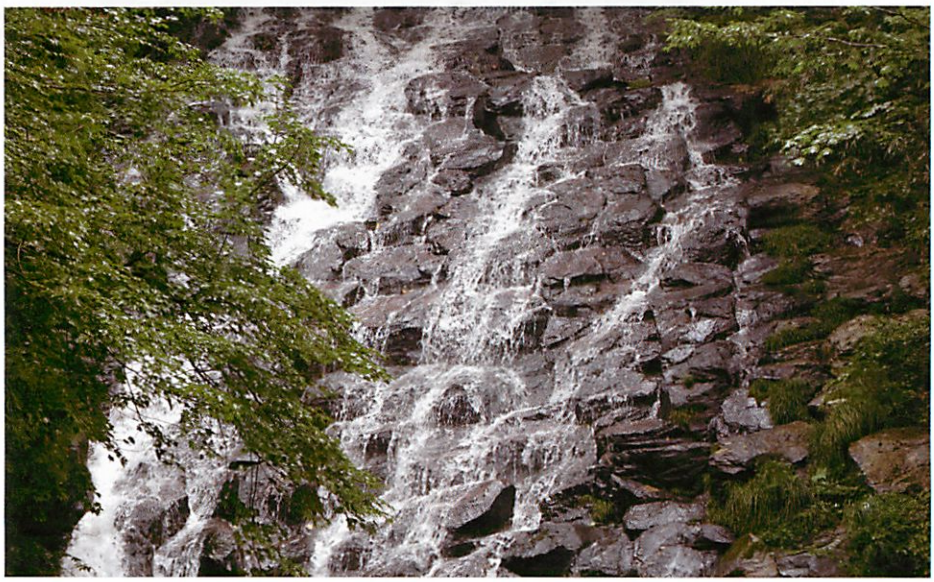

図３　布滝を作る岩盤　玄武岩溶岩の六角柱状節理

津山盆地の北東には、那岐山から連なる山地がそびえている。その主峰の那岐山は標高１，２５５ｍで岡山県下でもトップ５に入る高さの山であるが、津山市域からは少しそれている。しかし、これに連なる滝山は津山市域にあり標高１，１９６．５ｍである。実は、北東部の三十人ヶ仙に連なる天狗岩も２万５千分の１地形図では全く同じ１，１９６．５ｍであり、この２峰が津山市域で最も標高が高い地点である。滝山、広戸仙など那岐山の山系（図４）では、北側の山麓では花崗岩を基盤とし、その上位に母岩の変成岩類があり、さらにその上に古第三紀始新世に活動

した火山岩類が覆っている。したがって、この山系も地質の違いによる差別侵食の結果残存した山々であると考えられるが、同時に、津山盆地北側に南南東に延びる古い構造線もしくは断層が存在し、その運動によって津山盆地の北側が大きく隆起したため、山地との地形的なコントラストが顕在化しているとも考えられている（太田他編，２００４）。

図４　加茂町下津川より見る広戸仙（1,115ｍ）

津山盆地の南および西側には、神南備山、大崩山、加治子山など標高３５０ｍから６５０ｍの山々が連なり、その高さを保持したまま南に広く展開して吉備高原を形成している。西部の津山市坪井の北にある矢倉山（６５９ｍ）付近の山々は中国山地の前衛の山塊である可能性があり、中国山地と吉備高原は、美作追分と津山盆地の東西中央軸を結ぶラインで区分けされるのが適当かもしれない。津山市南方の吉備高原は、標高４００ｍから５００ｍ付近でうねるような比較的平坦な山上地形が展開する。その中を河川が南流し、河川流路部で緩いＶ字形の、標高差３００ｍ前後の谷を作っている。津山市域の吉備高原は、高原地形の北縁部に位置している。大崩山（６４３ｍ）は、その平坦面から首一つ飛び出た高さを持っている。大崩山は、矢倉山など中国山地前縁の山々と同程度の標高であることから、もともと中国山地の南側には６００ｍから７００ｍの標高の高原地形があって、侵食が進むにつれて高位の平坦面が削剥されたと考えられる。つまり、中国山地と吉備高原の区分けは本質的には大きな意味はなく、両者は一連の地形として発達してきたことを物語っている。

## 文　献


・小畑浩（１９９１）中国地方の地形．古今書院，２６１ｐ．
・磯崎行雄・丸山茂徳・中間隆晃・山本伸次・柳井修一（２０１１）活動的大陸縁の肥大と縮小の歴史―日本列島形成史アップデイト―．地学雑誌，１２０（１），pp. 65―99．
・太田陽子・成瀬敏郎・田中眞吾・岡田篤正編（２００４）日本の地形６近畿・中国・四国．東京大学出版会，３８３ｐ．
・藤井駿 監（１９８８）郷土歴史大辞典岡山県の地名．平凡社．
・産総研地質調査総合センター　20万分の１日本シームレス地質図
(https://gbank.gsj.jp/seamless/)
・山田直利（１９６６）５万分の１地質図幅説明書「智頭」．工業技術院地質調査所，69ｐ．



（岡山理科大学教授／自然風土編執筆者）

津山市教委（生涯学習課）・美作大学共催

# 美作学講座

## ―津山市史関連研究から―

## ●第4回　12月5日

# 津山松平藩の武家女性について

前岡山地方史研究会会長　妻鹿　淳子 氏
（近世編執筆者）

平成27年度の本講座の最終回は、女性史の研究を丹念に継続され、勝央町での資料調査に基づいた著作もある妻鹿氏を講師にお迎えしました。津山市史の編さんでは武家女性の研究から着手され、津山藩松平家の武家女性がどのような存在であったのか、今までの調査成果を基にお話しいただきました。

まず、藩主と家族の居住空間である御殿の表と奥の区別を、津山藩江戸屋敷の絵図から確認したうえで、藩主の子女の生母であっても身分が女中ならば家族として扱われないことや、奥女中の組織・働き方の実態、御側女中のライフサイクルを、江戸日記、分限帳などの藩政資料を読み解きながら順に紹介されました。武家女性は表での活動ができぬ反面、奥から政治を動かすこともあり、津山藩での事例を掘り起こすのが今後の課題だということです。

28年度の美作学講座も、同じく市史の執筆者を講師として、4回程度の開催を計画していますので、引き続きご期待ください。

津山市史だより
第5号

発行：平成28年3月31日
編集：津山市史編さん室
〒708-0022　岡山県津山市山下92　津山郷土博物館内
TEL：0868-22-5820　FAX：0868-23-9874　Eメール：tsu-haku@tvt.ne.jp